

行田税務署管内納税貯蓄組合連合会長賞 銅賞

税でつながる社会

加須市立昭和中学校

一年 近藤 亜衣莉

私にとって、税金はどこか遠い世界の、大人たちの話だった。毎日の学校生活で使う教科書も、体育館の床も、休み時間に友達と話す教室の机も、すべてが当たり前にそこにあるものだ、何の疑いもなく思っていたのだ。放課後、家族とよく利用する図書館も、休日に行く公園も、誰かがお金を払ってくれているのだらうと漠然と考えることはあっても、それが自分たちの払う税金で成り立っているとは、正直なところ、深く認識していなかったのである。

そんな私の意識が変わったのは、ある日、通学路の工事現場を目にした時だった。普段から利用している道が、大きな機械とたくさんの作業員によって整備され、見違えるほどきれいに変わっていく光景。最初は

「なんだ工事か。」

と少し不便に感じていたのだが、ふと

「これだけ大規模な工事なら、誰がお金を払うのだろう。」

という疑問が湧いたのだ。その疑問を家族に話してみると、母が

「ああ、あれも税金でやっているんだよ。」

と教えてくれた。

その一言は、私にとって大きな驚きだった。日々の生活で当たり前だと思っていた道路の整備や、学校の修繕、そして公共施設の運営の多くが、私たちが納める税金によって支えられているという事実には、目から鱗が落ちるような思いがした。これまで意識していなかった見えない支えが、実は私たちのすぐそばに、そして生活の隅々にまで行き渡っているのだと知った時、税金に対する認識ががらりと変わったのだ。それは、まるで空気のように当たり前すぎて意識していなかったものが、実は私たちの呼吸を支える不可欠なものだったと気づいたときのように、深い感謝の念が込み上げてきたのだ。

この気づきから、私は社会とのつながりを強く意識するようになった。税金は、私たち一人ひとりが社会の一員として、お互いを支え合うための仕組みなのだと理解したのである。私たちが納める税金が、困っている人々を助けたり、未来を担う子どもたちの教育を支えたり、高齢者が安心して暮らせる社会を築いたりするために使われている。そう考えると、税金を納める事は、単なる義務ではない。社会をより良くしていくための、尊い支え合いの活動であると、私は確信したのだ。

今後の私は、これまで無関心だった税金の使われ方を学んでいきたいと思っている。そして、将来、税金を納める立場になった時には、それが社会への貢献であるという誇りを持ちたい。私たちが生きているこの社会は、決して一人で成り立っているわけではないのだ。税金という形でつながり、支え合うことで、私たちはより安全な未来を築いていける。この事実を胸に、私はこれからも社会の一員として、責任ある行動をとっていく。